



東日本大震災から8年

2011年3月からはやくも8年が経過しました。当時小学生であった方が大学生となっており、さらに現在の小学生では、震災後に生まれた方も多くなっています。これは、津波被害等の風化を意味します。

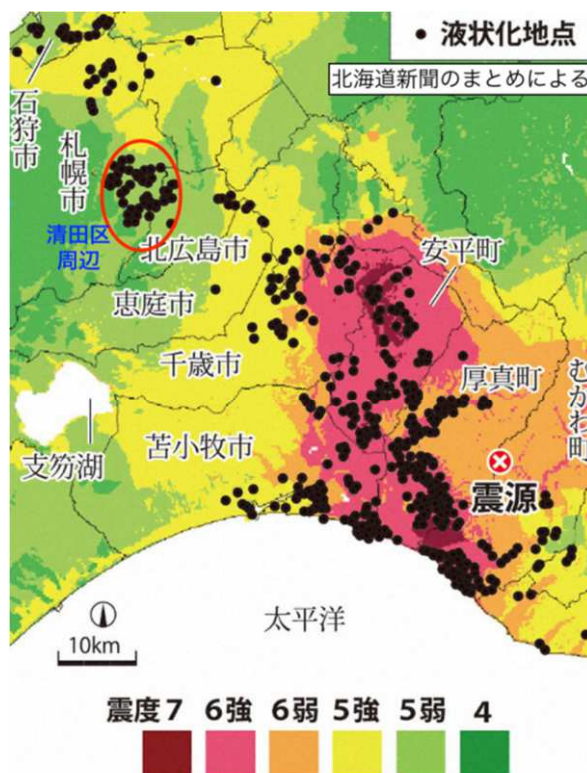
震災直後は、「津波の映像を見たくない」「津波の映像を見せたくない」という意見が多数でしたが、NHK が最近行ったアンケート調査では、小学校や中学校での防災教育で、当時の写真や映像を見せるかどうか尋ねたところ、「したほうがいい」が36%、「どちらかと言えばしたほうがいい」も36%で、合わせて72%という多数の方が、防災教育にはこのような映像による教育・啓発活動が必要と考えているという結果になったそうです。

この話題に関連する[防災コラム](http://www.sems-tokaiuniv.jp/tmp/20190310shizushin.jpg)を3月10日付けの静岡新聞に掲載しました。お時間のある時にご覧頂ければ幸いです(<http://www.sems-tokaiuniv.jp/tmp/20190310shizushin.jpg>)。

北海道胆振東部地震から半年

昨年9月6日の地震からはや半年が経過しました。この地震では災害関連死を含めて42名が死亡し、今も352世帯、890人が避難生活を余儀なくされています。厚真町では、まだライフラインの復旧がなされておらず、水道の復旧にまだ年単位で時間がかかるため、一部損壊にもかかわらず仮設住宅暮らしを続けざる得ない方もいらっしゃるようです。また、「まだ心の整理がつかない」という方も多く、心のケアの重要性を改めて確認する状況です。

またこの地震では停電だけでなく、斜面崩壊だけでなく液状化も多発し大きな話題となりました。特に札幌市清田区周辺では、震度4程度であったにもかかわらず甚大な被害が発生しました。この地区は1968年、2003年の十勝沖地震でも液状化しており、極めて軟弱な地盤が広がっている事は知られていたのです。地区の名前の由来も「美しい清らかな水田地帯」という事だそうです。名は体を表す事もあるのだという事を知っておく必要があると思います。

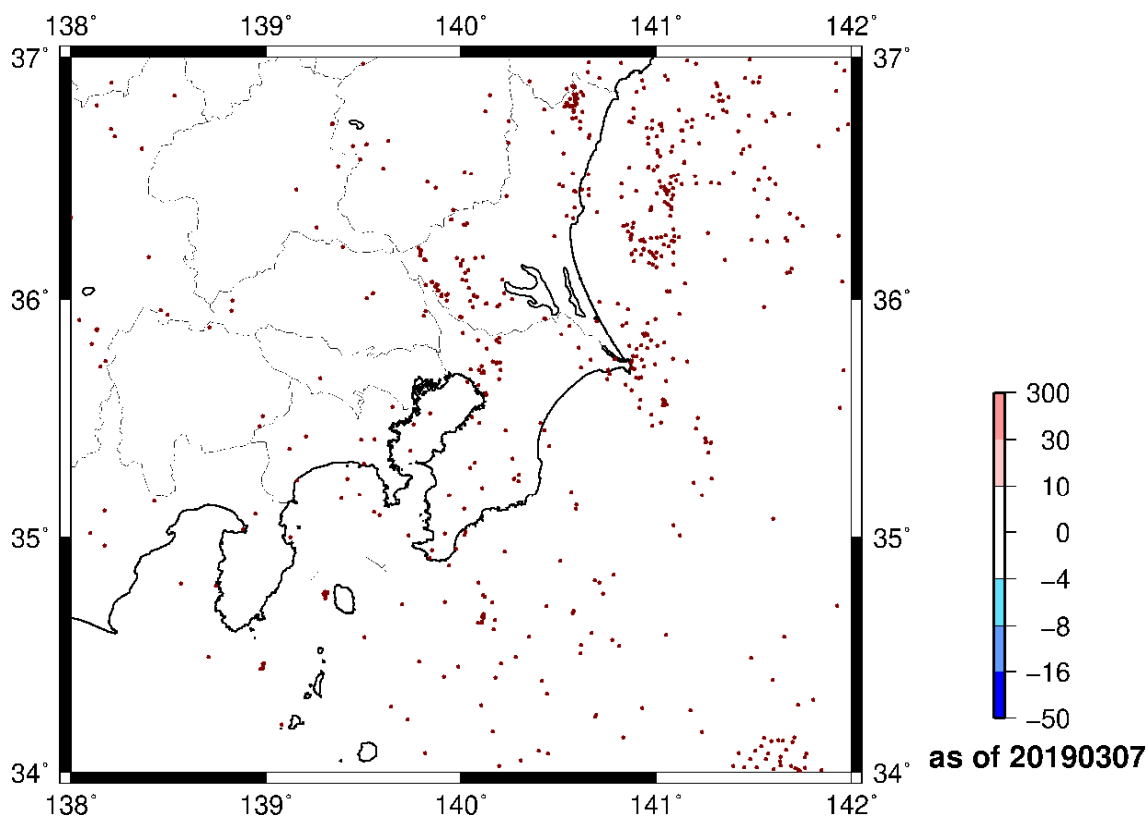




首都圏の地下天気図®

2月4日のニュースレターに続き、3月7日時点の首都圏に特化した地下天気図をお示しします。首都圏は、直下にフィリピン海プレート、その下に太平洋プレートが存在し、非常に深い所まで地震が発生していますので、首都圏では、深さ20kmあるいは60kmという深さを基準として計算を行っています。これはより深い部分で発生する地震をより重要視(計算の重みが大きいと表現します)するためです。

実は今回もMタイプでもLタイプでも全く異常が見られない事がわかりました。白地図に見えますが、計算の結果、異常が現在は存在しない事がわかりました。



図中の点は、前回の解析以降に発生した地震の震央(地下にある震源を地表に投影した点)を図示したものです。このような平面図では震央と震源のプロットは一致します。

点が沢山ある地域はそれだけ沢山地震が発生した地域ですが、地下天気図では、その地域の平均的な地震活動からの“ずれ”を計算していますので、点が沢山あるところが活性化するという事ではありません。それまで地震があまり起きていなかった地域で地震が発生すると、その地域で地下天気図が赤く表現されるようになります。